

Title	『ナロオド』時代の新人会の活動
Sub Title	The Shinjinkai activity in The Narod Period
Author	中村, 勝範(Nakamura, Katsunori) 内川, 正夫(Uchikawa, Masao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1981
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.54, No.3 (1981. 3) ,p.59- 83
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	遠峰四郎教授退職記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19810315-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『ナロオド』時代の新人会の活動

中 村 勝 範
内 川 正 夫

序

- 一 研究・啓蒙宣伝活動
- 二 労働者との接触
- 三 救 露 活 動
- 四 地方の状況
- 五 結 語

序

東京帝国大学新人会は大正十(一九二一)年七月、機関誌名を『同胞』から『ナロオド』と改題した。改題の理由は明確ではないが、『同胞』時代に新人会が精力的に働きかけた労働者や地方支部の人々の反応が期待に反するものだったからだともしられる。⁽¹⁾『ナロオド』は大正十年七月から大正十一(一九二二)年四月まで刊行された。

『ナロオド』時代の新人会は新人会全体として労働運動に携わることはなくなつたが、大学を卒業した会員が労働運動の指導者として大きな役割を果たしていたこともあつて学生会員の中にも少数ながら実践活動に従事する者もいた。少数の実践

派に対し、多数を占めたのは研究活動を重視する学究派の会員達であつた。この期の新人会は労働者や地方支部との触れ合いよりも研究活動に力をそそいだ。この実践派と学究派への分裂そして対立の結果、新人会は『ナロオド』創刊約四ヵ月後の大正十年十一月三十日以後、卒業生を除く在学生のみの思想団体として存続することになった⁽²⁾。以後、在学生にして新入会員は従来通り会員といわれ、卒業生にしてかつて新人会に入会していたものは会友といわれることになった。従来、新人会は卒業生と在学生を含む会であつたが、この時以後在学生だけの組織となつた。大正十一年三月十七日の新人会例会は『ナロオド』の廃刊を決議し、新人会機関誌の暫時発行休止を明らかにし、第九号は『ナロオド』の最終号となつた。『ナロオド』を廃刊した三月、新人会は七名の卒業生を送り出した⁽⁴⁾。新年度に入会した者の数はさきに卒業した者より少数であつた。翌大正十二(一九二三)年四月に学友会改革運動で活発な行動を展開するまで、新人会は不振の時代を送ることになる。

本稿は『ナロオド』創刊の時期から終刊の時期に至るまでの新人会の会員及び会友の足跡を考察しようとするものである。

(1) H・スミス著、松尾尊兒・森史子訳『新人会の研究』(東京大学出版会 一九七八年十二月) 七五頁。

(2) 「十一月三十日、夜大学内第二学生控所で懇談会を開いた結果、巻頭に宣言して置いた通り、新人会の方針を変更して、三週年を迎えると共に学生のみの方針とする事に決定した。我等は時代と共に生長してゆく。学校を出た者が、各自自由に行動し得んが為には、新人会と独立の立場を取る事が必要である事を認める。恐らく新人会は今後永久に大学内の新思想団体として存続してゆくであろう。」(「上富士前だより」)△「ナロオド」第六号 大正十年十二月 一六頁)。

(3) 『ナロオド』の廃刊を新人会はつぎのように読者へ告げた。すなわち、「四月号が、諸君の手許にとゞくと同時に、諸君は『ナロオド』の廃刊——我等の機関誌の暫時の発行休止——の事を知られるであろう。」(「下落合だより」)△「ナロオド」第九号 大正十一年四月 一五頁) というものであつた。

(4) 卒業生と卒業後の進路は、河野密(東京朝日新聞)、千葉雄次郎(東京朝日新聞)、住谷悦治(同志社大学)、風早八十二(東大刑法学)、細迫兼光(弁護士)、小岩井浄(弁護士)、米間恭(東京日日新聞)である。

(5) 卒業生を送り出した後、会内に残った人々は、莊原達、黒田寿男、友岡久雄、猶崎輝、服部英太郎などであり、志賀義雄、伊藤好道、杉野忠夫などが加わった(菊川忠雄『学生社会運動史』海口書店 昭和二十二年六月 一四二頁)。志賀義雄は入会前後を回想してつぎのように記している。「新人会に入会したのは一高柔道部員であつた私の先輩達が新人会員であつたのが契機である。奇妙なことに一高柔道部は他のそれが反動・体制的であつたのに對し、革新の氣風が強く、ハネ腰の得意な三輪寿壯などが先輩にいた。柔道部の二年上の宮崎公平の影響を一番先に受けたのが私で、その後一年上の村山藤四郎、マネージャーの水野成夫などが後から運動に参加した。二月に新人会の送別会があり、一高を卒業する前から新人会員として紹介されたのは私をはじめでたつた。當時、新人会は卒業生とわかれて学生団体となり会員が少数だつた。」(志賀義雄「新人会の思い出」八廣應義塾大学法学部政治学科中村勝範研究会『東京帝大新人会研究ノート』 昭和五十四年十一月 一二頁)。

一 研究・啓蒙宣伝活動

新人会は『同胞』時代に石川三四郎の指導のもとに「社会運動史概論」⁽¹⁾を研究していた。研究会は『ナロオド』の頃終了するが、夏休みを利用して新人会員は各国社会運動史を研究した。新人会員が研究した成果は『ナロオド』誌上に発表されることになつたが、実際には波多野鼎の「露西亞労働運動史考」(二回連載)が発表されただけである。研究会を通じての成果や個人が夏休みに行つた研究の成果として現われたものは波多野の研究だけであつたが、『ナロオド』はそれ以前の新人会の機関誌と比較し、時評、随想的なものより研究論文に類するものが目立つている。平貞蔵の「産業革命に就て」(三回連載)、川原次吉郎の「労働史の研究」(二回連載)、蠟山政道の「十九世紀百年間に於ける英国労働運動」(三回連載)その他研究的なものが多い。

啓蒙宣伝活動の一環として『ナロオド』時代に新人会がおこなつた演説会について見るとつぎの通りである。

1、大正十年九月二十日。『ナロオド』創刊当時における最大の社会問題は神戸の労働争議であつた。すなわち大正十年六月二十五日、三菱内燃機神戸工場の労働者が団体交渉権、増給の嘆願書を提出し争議に突入するや、七月には争議の波は川崎造船及び三菱造船に拡大し、参加者三万人余となり、戦前最大の争議となつた。⁽²⁾新人会の公開演説会のテーマは神戸労働

働争議に関係するものであつた。出演者は賀川豊彦、赤松克麿、山崎一雄の三名であつた。かれらは、同争議の指導者であつた。賀川は争議の中心的指導者であり、山崎は三菱神戸造船所の争議を指導し、赤松は川崎造船所の争議を指導することにより、それぞれその名を轟かせていた。大学三十二番教室には定刻前から聴衆が詰めかけ、人々の同争議に対する関心の高さが示され、満場全く立錐の余地もない盛会であつた。⁽³⁾なお、研究的色彩の濃い『ナロオド』が神戸の労働争議に直接関係した記事を比較的熱心に掲載した。⁽⁴⁾珍らしいことであつた。

2、十月二十八日。前回同様三十二番教室で開かれた。来間恭、住谷悦治、石濱知行が出演した。聴衆は多くなかつたが真面目な者ばかりであつたといひ、晩餐会には早大文化会の者も出席した、と記録された。⁽⁵⁾前回の演説会及びこの後の演説会における聴衆が多勢であるのに比較し、この回の聴衆は多くなかつた。出演者の演説テーマも記録されておらず、統一テーマも記されていないことから演説会がおこなわれなくてはならぬ問題の焦点を明確に定めることができなかつたのか、それとも知名度の低い演説者(来間、住谷が会員、石濱が会友)にたよつたことが理由であつたのか、それとも他に理由があつたのであろうか、その点、不明である。

3、十二月十九日。第三回目の演説会を開催した。法学部三十番教室では、大山郁夫を来賓演説者とし、千葉雄次郎、細迫兼光、来間恭が登壇した。学期末にも拘らず聴衆が多数集まり近來珍しく緊張した会合であつた。演説会後、同夜、第二学生控所で開かれた晩餐会には、大山の他にも小泉鉄、早大文化会、オーロラ協会、札幌農大の学生が多数参加した。午後十時に晩餐会を閉じるのが残念に思われたほど盛会であつた。⁽⁶⁾

次に演説会以外の啓蒙宣伝活動を考察してみよう。

新人会三周年記念懇親会。大正十年十二月三日に、稲毛で開かれたが、久し振りに佐野学も出席した会合にしては少数の来会者にとどまつた。⁽⁷⁾

新人会の各機関誌時代の活動

機関誌 時期及 期間	デモクラシイ 大正8年3月 ~12月 10ヵ月	先 驅 大正9年2月 ~8月 7ヵ月	同 胞 大正9年10月 ~大正10年6 月 9ヵ月	ナ ロ オ ド 大正10年7月 ~大正11年4 月 10ヵ月
演 説 会	4	2	8	3
講 演 会	2			
学術講演会	1		1	1
宣伝もしく は講演旅行		1	1	
討 論 会	1			
イブニング			1	1
そ の 他	3	2	7	0

(各機関誌の活動記録にもとづき、回数が明瞭なものだけを表に作成した。)

- 1 大正7年12月、大正8年1月、2月は『デモクラシイ』時代、大正9年1月は『先驅』時代、大正9年9月は『同胞』時代とする。
- 2 各活動の名称は機関誌に表記されたものを使用した。相互間に区別がかならずしも判然としな
いものもある。上表以外にも、例会、創立記念祭、読書会、労働講習会、送別会、晩餐会等の名称
も見られるが、割愛した。
- 3 その他には、会員（もしくは会友）が個別に実施しかつ機関誌に報告された啓蒙活動の回数を示
した。

創立三周年記念公開講演会。大正十年十二月十日
に計画されていたが、中止された。中止の理由は会
場都合であった。すでに出演者までも決定していた
講演会の中止であった。新人会は啓蒙宣伝のチャン
スを逸して残念であるとしている。⁽⁸⁾

イブニング。大正十年十二月二十一日に、帝大基
督教青年会館でイブニングを開催した。講師はペト
ログラード大学出身の小野俊一であった。小野はロ
シア革命時にロシアに滞在していた。小野は、聴衆
約四十名を前にして、「革命当時に於ける大学生の
運動」について実見談を披瀝した。小野の実見談が
どのようなものであつたかは不明であるが、新人会
員の琴線にかならずしも響くものではなかつた。⁽⁹⁾

新人会学術講演会。大正十一年に学内において新
人会学術講演会を開催した。一月に末弘巖太郎が
「農村法律問題」を講演した。二月には土方成美が
講演したようであり、佐野学が講演する予定になつ
ていた。⁽¹⁰⁾新人会の学術講演会は大正八（一九一九）

年十二月に第一回目が帝国教育会において開催され、大正九（一九二〇）年十月に第二回目が前回同様、帝国教育会において聴衆六百人を集めて開かれた。いずれも盛会であり、第一回目の成功の際にはすくなくとも毎年二回の学術講演会の開催を新人会は予告した。⁽¹¹⁾このような予告が出たことは、新人会が啓蒙宣伝のための民衆大学として同講演会に多大な期待を寄せたからであろうが、結局のところ、年二回実施の予告は果されなかつた。『ナロオド』時代の学術講演会は「新人会学術講演会」とされた。講師名が記されてはいても演題は末弘以外は不明である。第一回目と第二回目の学術講演会は講師と各講師のテーマが完全に記録されているだけではなく、その内容も記録されている。⁽¹²⁾第一、二回目の学術講演は講演集として出版された。これに対し、新人会学術講演会についてはかような企画がなされた気配はない。この学術講演会以後、新人会が『ナロオド』時代に演説会を開催した記録はない。新人会は『ナロオド』最終号において廃刊後も宣伝活動に力を注ぐと決意を表明したが、特筆すべきものは終刊より数えて約五カ月後の九月に伊藤好道、志賀義雄、友岡久雄、黒田寿男、杉野忠夫などが関西から九州にかけて地方遊説するまでなかつた。⁽¹³⁾

『ナロオド』時代における活動は、それ以前の時代と比較すると不活発であつたことは別表により明瞭である。特に、『同胞』時代に比べ活動の退潮は顕著である。別表に示される活動の回数を比較すると、『ナロオド』時代は『デモクラシー』、『先駆』、『同胞』のどの時代よりも見劣りがすることがわかる。さらに活動の内容に立ち入って考察すれば、『デモクラシー』時代には新人セルロイド工組合を結成するなど活動は上昇期にあり、『先駆』時代にはもつとも短期間であるにもかかわらず信濃路の宣伝旅行など新人会にとつて意義深い活動が展開されていた。『ナロオド』時代にはかような特筆すべき活動はなかつた。

『ナロオド』期に会友はいかなる運動をしていたかという点につき、考察を進めよう。会友は東京帝国大学卒業のわが国最高の知識人である。かれらの社会的活動は労働者教育の方面に力がそそがれていつた。大日本労働総同盟友愛会は『ナロ

オド』時代にあたる大正十年九月十六日に日本労働学校を開校させている。⁽¹⁴⁾ 同学校における科外講師に新人会員としては左野学の名が見られた。⁽¹⁵⁾ 同様の労働者教育に多数の新人会の会員及び会友が講師として携わった事例としては月島労働講習会がある。月島は初期の新人会員と労働者が邂逅した場所であつた。大正十年十二月四日に月島労働会館において労働者講習会が発会式をあげた。労働者が社会生活を送る上で必要な学術を講習しようという目的で講習会は運営された。学科及講師は左の通りである。⁽¹⁶⁾ 長谷川如是閑、吉野作造、北沢新次郎、末弘巖太郎を除いた他の講師は新人会の会員と会友である。

学科及講師

課目

講師

時間

労働者問題	嘉治 隆一	土曜の(一)
社会学	波多野 鼎	火曜の(二)
社会思想	千葉雄次郎	土曜の(一)
各国労働運動史	蠟山 政道	火曜の(一)
法学通論	三輪 寿壮	火曜の(一)
労働法規	細野三千雄	土曜の(二)
経済学	平 貞蔵	土曜の(二)
科外講師		
国家論	長谷川如是閑	
近世の政治	吉野 作造	
日本労働運動史	山名 義鶴	
露国農制	佐野 学	
各国労働党事情	北沢新次郎	
和解及仲裁制度	末弘巖太郎	

東京で日本労働学校が創立されたことは関西においても労働学校設立の機運を盛り上げた。大正十一年二月には東京の労

働学校に対抗するものとして大阪労働学校の創立委員の名前が発表された⁽¹⁷⁾。同委員中には新人会友であり大原社会問題研究所所員となっていた山名義鶴の名が見られた。承諾済の講師として山名とともに三輪寿壮、松沢兼人が講師陣の中に加えられていた。大阪労働学校は大正十一年六月一日に安治川教会で開校式を挙行した。すでに新人会の機関誌『ナロオド』は廃刊されていたが、松沢兼人は主事となり、校長の賀川豊彦を助ける任に着き、新明正道が社会学を、小岩井浄が社会運動史を、松沢が経済原論を担当することになった⁽¹⁸⁾。東京、大阪における労働学校の講師に新人会の会友が参画し、月島においては講師の大部分が新人会の会員及び会友により占められたところに新人会の成長した姿があつた。

新人会友は労働者教育以外の場においても社会的な活動をつづけた。法律の社会化・民衆化を目ざす中央法律新報社の同人中には細野三千雄、三輪寿壮、宮崎龍介がいた⁽¹⁹⁾。中央法律新報社主催の講演会は『ナロオド』時代にも開催され、細野、三輪、宮崎は他の講師とともに熱弁を振つた。大原社会問題研究所には林要、山村喬、河西太一郎が助手として入所しており⁽²⁰⁾、同研究所主催の読書会において講師となつた⁽²¹⁾。佐野学は建設者同盟において大正十年五月には週に一回研究会の講師となり農村問題を講義していた⁽²²⁾。『ナロオド』時代に至り、八月には建設者同盟夏期講習会が早稲田大学講堂で開催され、佐野は「日本階級闘争史」を講義した⁽²³⁾。かくの如く新人会友は広く啓蒙宣伝活動にあたつていた。

『ナロオド』時代の新人会は実践活動を減少させ、研究活動へ力を注いだが、新人会が啓蒙宣伝への情熱を放棄して冬眠の時期を迎えたというわけではない。新人会の名の下になされる企画こそ減少したとはいえ、会員はそれぞれの立場で機会あるごとにかねらの思想の啓蒙宣伝につとめた。会員個々の活動は彼等が活動に臨み抱いていた社会認識の点において広義の意味では新人会の思想を具現化するものであつた。新人会全体としての活動であれ、会員・会友個人としての活動であれ、その活動の基底には現代社会は資本主義により危機に陥入つており、資本主義を改造し現代社会を救済することこそ急務であるという共通の認識があつた。新人会員・会友はその認識を事あるごとに「ナロオド」に扶植しようとした。

- (1) 「上富士前町から」(『ナロオド』第一号 大正十年七月 一六頁)。新入会員が石川三四郎の思想に影響されていたことは中村勝範・酒井正文「『同胞』時代の新人会の活動」(『法学研究』第五十三卷第十一号 昭和五十五年十一月)において論じた。また平貞蔵はつぎのように回想している。「私たちがそのころ読んでいた本は、石川三四郎の『社会思想史』」(『平記念事業会編『平貞蔵の生涯』昭和五十五年五月 一一頁)となつてゐる。平たちが石川の著書により勉強したことはわかるが、石川には『社会思想史』という著書はない。『西洋社会運動史』(大正元々一九二〇年十二月)であるかもしれない。
- (2) 岩波書店『近代日本総合年表』(一九七八年十一月第二刷) 二四六頁。
- (3) 「上富士前だより」(『ナロオド』第四号 大正十年十月 一六頁)。
- (4) 和田元(嘉治隆)「時評」(『ナロオド』第二号 大正十年八月 一一頁)、「罷工エピソード(一)」、前山清(山崎一雄)「神戸の大労働争議に就いて」、「罷工エピソード(二)」、「上富士前だより」(以上は『ナロオド』第三号 大正十年九月 三、一三、一五、一六頁)。
- (5) 「上富士前より」(『ナロオド』第五号 大正十年十一月 一六頁)。
- (6) 「上富士前より」(『ナロオド』第七号 大正十一年一月 一六頁)。
- (7) 「上富士前より」(『ナロオド』第六号 一六頁)。
- (8) 右同。
- (9) 「上富士前より」(『ナロオド』第七号 一六頁)。小野俊一は『中央公論』大正十年九月号及び十月号において二回にわたり「ロシア全土をボルシエウイキの天下たらしめた諸原因の歴史的考察」(上、下)を執筆している。
- (10) 「上富士前より」(『ナロオド』第八号 大正十一年二月 一六頁)及び「下落合だより」(『ナロオド』第九号 一六頁)。
- (11) 「新人会記事」(『先駆』第一号 大正九年二月)。
- (12) 第一回目の講師と演題は、大山郁夫「破壊の原理と改造の原理」、吉野作造「改造の理想」、森戸辰男「生存権と労働の芸術化」、榎田民蔵「資本経済の本質と社会改造の方向」であつた。第二回目は、北沢新次郎「労働組合の諸問題」、室伏高信「ギルド社会主義の発達及其原理」、有島武郎「ホイットマンに就いて」、長谷川如是閑「ソリダリテイの法理」であつた。
- (13) 石堂清倫・堅山利忠編『東京帝大新人会の記録』(経済往来社 昭和五十一年六月)に所収された「新人会年史表」(三七六頁)によれば、同遊説は、八高、京大、同大、三高、六高、五高、七高、佐賀高を一巡し学生思想団体の連合を促進した。
- (14) 「本部日記抄」(『労働』第十卷第十一号 大正十年十一月号 二二頁)。
- (15) 大原社会問題研究所編『日本労働年鑑 大正十一年』(大原社会問題研究所 大正十一年七月) 一六七―一八頁。
- (16) 右同 一六九―一七〇頁。
- (17) 『労働者新聞』第五十六号 大正十一年二月十五日。

- (18) 大原社会問題研究所編『日本労働年鑑 大正十二年』(大原社会問題研究所 大正十二年七月) 一六四頁。
- (19) 「社告」『中央法律新報』第一卷第十四号 大正十年九月一日 三〇頁。
- (20) 法政大学大原社会問題研究所編『大原社会問題研究所三十年史』(法政大学大原社会問題研究所 一九五四年四月) 二九頁。
- (21) 前掲『日本労働年鑑 大正十一年』一六九頁。
- (22) 右同 四五六頁。
- (23) 建設者同盟史刊行委員会『早稲田大学建設者同盟の歴史 大正期のウ・ナロード運動』(日本社会党中央本部機関紙局 一九七九年九月) 八六一―八六二頁。

二 労働者との接触

新人会の主張する「ウ・ナロオド」運動は、発生の地ロシアが農民運動に主力を置いたのとは異なり、労働者の中に活動の舞台を求めるものであつたから、⁽¹⁾『デモクラシー』時代には新人会は新人セルロイド工組合を結成したように労働運動に直接参加した。学窓を巣立つた会員の一部は労働組合のリーダー、法律顧問として労働運動に関係するようになった。大日本労働総同盟友愛会には棚橋小虎が本部長として入会し、やがて麻生久も本部入りした。全日本鉱夫総連合会が成立したのは大正九年十月二十日である。同総連合会は従来からあつた三つの鉱夫組合組織が合同したものであつた。母胎となつた三組織は大日本鉱山労働同盟会、友愛会鉱山部と全国抗夫組合であつた。三組織のうち全国抗夫組合は大正八年十月七日に結成されたが、佐野学、石渡春雄が相談役となつた。⁽²⁾全日本鉱夫総連合会の結成に際し、本部理事及び機関誌『鉱山労働者』の発行編集兼印刷人として麻生久が就任し、相談役には佐野学、棚橋小虎、三輪寿壮、赤松克麿が就任した。⁽³⁾この役員人事は『ナロオド』時代においても一部を除いて継続された。結成からほぼ一年後の大正十年九月の段階でも新人会員は同組織の中核であつた。麻生の地位は不変であり、調査部は七人中四人が新人会友であつた。すなわち、佐野学、棚橋小虎、赤松克麿、三輪寿壮であつた。法律相談部は六人中四人が新人会友であつた。すなわち、三輪寿壮、細野三千雄、棚橋小虎、宮

崎龍介であつた⁽⁴⁾。同総連合会本部にはしばしば新人会員の訪問もあつた。大正十年三月に卒業し、東京日日新聞に入社していた門田武雄は、同総連合会の協議会に麻生、佐野、赤松、棚橋などともに出席して⁽⁵⁾いる。赤松と徳山中学校の同窓であり、東京帝国大学在学中の莊原達も本部を訪れ活動に参加した⁽⁶⁾。

以上の例に示されるように、新人会員及び会友の一部は労働運動に深く関係した。これらのものが実践派であつた。この実践派の中には神戸の労働争議に積極的に参加する会友もいた。すなわち、赤松克麿、山崎一雄であつた。七月二十九日に、神戸のデモ行進が官憲と衝突し警官の抜剣事件が発生すると、赤松は、友愛会の鈴木文治会長、松岡駒吉などともにただちに神戸に急行した⁽⁷⁾。赤松は神戸において美術倶楽部に設けられた川崎争議団本部の顧問となり争議の先頭に立つた⁽⁸⁾。

八月九日になり、争議団が無条件就業を宣言し敗北をみとめた時、赤松は、力と血とを捧げたる、戦い遂に敗れたり、と惨敗記念の歌をつくつた⁽⁹⁾。山崎は同年四月に卒業して大阪時事新報の記者となつていたが、神戸の争議に際会して第二互助倶楽部に設けられだ三菱争議団本部の顧問となつた⁽¹⁰⁾、このことが原因で新聞社を依願免職となつた⁽¹¹⁾。神戸で活動した新人会友は赤松、山崎に限らなかつた。この争議において、川崎争議団の五十人余が騒擾罪及び治安警察法違反で神戸地方裁判所に起訴された。この訴訟の弁護人として新人会友三輪寿壯、小岩井浄が活躍した⁽¹²⁾。彼等は金銭で頼まれたのではなく、真に正義人道の上から、何れも自ら進んで弁護にあつた⁽¹³⁾。

新人会は神戸の争議に対して叙上の会友のように直接参加はしなかつたが、争議支援の寄附金募集活動を行い、金三十円を争議団本部に送つた⁽¹⁴⁾。また、神戸の状況を報告する記事を『ナロオド』に掲載した。山崎一雄は川崎争議に関する公判模様を報じ、七月十九日の大阪中央公会堂における神戸の労働争議批判演説会の興奮の状況も伝えた⁽¹⁵⁾。同じく山崎は別の匿名記事において、争議中に行われた会社及び官憲の罷業切崩運動と無抵抗主義を唱える争議団との衝突の状況を詳述した⁽¹⁶⁾。山崎は神戸の労働者が争議に突入せざるを得なかつた理由とその後の経過を記し、神戸の争議は敗れたけれども所詮資本主義

下にあつては労働者の眞の勝利は得られず、たとえ敗北であつたにもせよ、今回の戦闘の中で勝利に必要なとされるすべての要素が結合し発展した程度を見なければならぬ⁽¹⁷⁾、とした。つまり、争議には敗れたが、将来の勝利のために大いに役立つた、と主張した。新人会は神戸の争議に直接に参加をしなかつたが、神戸における労働者の奮戦に同感を表明した。新人会は東京のすべての労働団体がとかく鳴りを潜めていることを憂慮していた。東京の労働団体の中には敵の軍門に降つてスパイに豹変するもの、解放が前途瞭遠であるために早くも見切りをつけ従順なる猫族に退化したものが多いと、強い憤りを感じていた⁽¹⁸⁾。東京の状況に危惧の念を持つていた新人会に、希望の光を与えたのはまさに神戸の争議であつた。沈滞した労働運動界中で例外的なものが神戸の争議であつた。かような意味合いで新人会は神戸の争議に対する関心を強め、夏休みあけに同争議に関する公開演説会を催した。盛会であつたことは既述のとおりである。

神戸における労働争議は『ナロオド』創刊時に発生し、かつ新人会友がこれを支援した争議であつたが、夕張炭鉱、足尾銅山、香焼炭鉱の争議は『ナロオド』創刊以前より発生していたもので、新人会友の一部が精力的に支援した争議であつた。夕張炭鉱は『同胞』時代に争議の解決を見ていたが、『ナロオド』創刊時の大正十年七月に入り会社側の約束不履行を原因として状況が陰悪化した⁽¹⁹⁾。麻生久は北海道に急拠赴き、争議を指導した。麻生はそのことにより、十四日には治安警察法違反により検挙された。麻生には禁錮十五日の判決があり、十一月二十一日から市ヶ谷の東京監獄に下獄し十二月五日に出獄した⁽²¹⁾。『ナロオド』は麻生の入獄を報じたが、夕張の状況を報告する記事はない。夕張の争議に限らず『ナロオド』では労働争議についての記事は少ない。第一号(大正十年七月)において、河西太一郎が大坂電燈株式会社⁽²³⁾の二次にわたる争議の顛末を報じ、第二号(八月)及び第三号(九月)において、嘉治と山崎が神戸の労働争議に関する記事を掲げたが、以後は足尾銅山への訪問記⁽²⁴⁾が掲載されたのみである。これは『同胞』とは好対象であつた。『同胞』は争議報告、労働組合の紹介等労働問題に関する記事を数多く掲げた⁽²⁵⁾。『同胞』は労働運動の状況を報告するに敏であつた。『ナロオド』にあつては、組

合紹介の類は皆無であり、争議報告も号を追うにつれ漸減し、やがて消える。ここにおいても、新人会が労働運動への接触を通過させていったことが示される。かような傾向の中でわずかに労働者との強い連帯関係を高唱するのは来間恭の「足尾行」のみとなる。

新人会結成以来、足尾銅山は新人会員とのかかわりの深い場所であつた。たとえば、麻生久は足尾争議の中心的指導者であつた。麻生は、足尾の労働者が苦しい生活に呻吟せざるを得なくなつた元凶こそ資本主義である、と断じた。⁽²⁶⁾資本主義の害毒により襤褸のごとき状態に置かれた労働者を救済するため、赤松と来間は、大正十年十一月十三日、足尾に向けて出発した。来間の手記によれば、足尾の町はむさくるしい、鉦夫長屋と綺麗な役宅が対象的に並び、いやでも資本主義下における富の偏在を感じさせた。赤松と来間は城崎座での講演会に臨み、聴衆五百人を前にして演説した。政治的自由がなく、人びとの反体制的な不満のはげ口の少ない時代であつた。登壇した弁士が、自分達のかわりに、政治や社会にたいして発言したいと思つていふことばを代弁してくれた。聴衆には痛快であつた。⁽²⁷⁾来間は足尾行の中から虐げられた者にとつて何事かが成される日が近いことを確信し、足尾の労働者が示してくれた友情に人類相愛の喜びを感じて帰京する。

『ナロオド』は、大日本労働総同盟友愛会の大会（大正十年十月一日開催）には関心をしめさなかつたが、総同盟の大会決議の中に新人会員名は登場した。⁽²⁸⁾すなわち大会決議中には総同盟の新機関誌『労働同盟』⁽²⁹⁾の主筆に赤松がなつたこと、同じく赤松が建議案委員になつたこと、調査部の野坂鐵と岡上守道が欧州に在つて欧州労働事情の調査中であること、労働争議犠牲者中に麻生が見られることなどが散見せられる。以上の事例が示すように、新人会員は『ナロオド』時代に労働運動に従事する場合、新人会組織に依存する必要はまったくなくなつていた。新人会に拠らずとも新人会員は労働運動の分野で活動できた。

新人会友の活動は労働運動のみではなく、農民運動にも及び日本農民組合の結成時には麻生、三輪、赤松が法律顧問とな

⁽³⁰⁾ 大正十一年八月十五日、機関誌『農民新聞』が創刊された時には、赤松が「時評」、野坂鐵が「農業労働者と組合運動」、莊原達が「社会講義（義民宗五郎）」、三輪寿壮が「法律問答」をそれぞれ担当執筆した。⁽³¹⁾ 実践派の人々はこのように新人会の枠を越えて活動を展開し、新人会を実践的方向に誘導するかのように見えた。この動きに対して学究派は納得しなかつた。実践派と学究派との間に、新人会はいかにあるべきかということをめぐる対立が生じた。その結果、新人会の組織改造が議論されるようになった。卒業生と現役との分離である。赤松は組織改造に賛成し、⁽³²⁾ 平貞蔵はかならずしも賛成しないという状況であつた。学生が進路を決めかねても不思議はなかつた。しかし、千葉雄次郎、細迫兼光、莊原達などの意見は組織改造に賛成であり、確執の末、新人会は、大正十一年十一月三十日に組織を変更し、大学生のみの会となり、以後卒業生は会友となつた。会友のなかで、平貞蔵、蠟山政道、佐々弘雄、三輪寿壮、嘉治隆一、林要、河西太一郎、河村又介、松本重治、松方三郎などが集まり、⁽³⁴⁾ 社会思想社が結成される。

(1) 前掲菊川『学生社会運動史』 八八頁。

(2) 麻生久伝記刊行委員会代表河上丈太郎編『麻生久伝』(麻生久伝刊行委員会 昭和三十三年八月) 二二一頁。

(3) 『鉱山労働者』第一巻第一号 大正九年十月。

(4) 『鉱山労働者』第二巻第十号 大正十年十月。

(5) 門田は全日本鉱夫総連合会の本部客員であつた(「本部日記抄」△『鉱山労働者』第三巻第五号 大正十一年五月 一五頁)。

(6) 莊原は全日本鉱夫総連合会が開催した足尾実情報告会のためにピラを二百枚書くなどの活動も行った(「本部日記抄」△『鉱山労働者』第二巻第六号 大正十年六月 一三頁)。

(7) 「神戸川崎三菱労働争議」(『労働』第十巻第九号 大正十年九月 一七頁) 及び鈴木文治「労働運動二十年」(総同盟五十年史刊行委員会 昭和四十二年八月) 二五三頁。

(8) 右同。

(9) 鈴木文治は、赤松が作つた惨敗記念の歌が、争議団員は勿論、小学校の児童にまで歌われた、と紹介している(前掲『労働運動二十年』 二五九頁)。また、赤松は争議の敗北について『労働者新聞』(第四十四号 大正十年八月二十五日)に「幻滅の教訓」として所感を述べている。赤松は、「今回の大争議は形式に於て敗れたけれども、実質に於て大きい躍進の一步であつた。私は此の大躍進の一步に加つた喜びと誇りとに感激しつゝ懐しい神戸

を去る者である」と文を閉じている。さらに、『鉱山労働者』(第二巻第九号 大正十年九月 三頁)に「神戸労働争議の回顧」を掲げ、争議の経過を報告した。

- (10) 前掲「神戸川崎三菱労働争議」(『労働』第十巻第九号 一八頁)及び前掲『労働運動二十年』二五三頁。
- (11) 「上富士前だより」(『ナロオド』第三号 大正十年九月 一六頁)。
- (12) 今井嘉幸『今井嘉幸自叙伝五十年の夢』(神戸学術出版 一九七七年六月)二三四―三五頁。
- (13) 『労働者新聞』第七十六号 大正十一年十二月十五日。なお、三輪寿社は神戸の争議について「惨敗をして生かしめよ」(『労働者新聞』第四十四号 大正十年八月二十五日)を執筆した。三輪は、「四十余日の争議は惨敗に終った。然し此惨敗を生かす道は労働組合の實力の充実より外にはないと私は思う会下山山上に懸る月影の悲しき色に冴ゆる事よ。橋分監に映う夕陽の紅の色に燃ゆることよ。私は感激と悲憤とを以て争議の跡を回想する。特に獄窓に呻吟する人の為に。」と文を閉じている。
- (14) 「上富士前だより」(『ナロオド』第三号 一六頁)。
- (15) 「罷工エピソード」(『ナロオド』第三号 三頁)。
- (16) 「罷工エピソード」(『ナロオド』第三号 一五頁)。
- (17) 「神戸の大労働争議に就いて」(『ナロオド』第三号 一三頁)、前山清のペン・ネームで執筆した。
- (18) 「上富士前だより」(『ナロオド』第三号 一六頁)。
- (19) 「夕張事件報告」(『鉱山労働者』第二巻第八号 六頁)。
- (20) 坂口義治「夕張事件控訴公判記」(『鉱山労働者』第二巻第十一号 大正十年十一月 四一―六頁)。
- (21) 全日本鉱夫総連合会は麻生と坂口の出獄記念撮影をし、写真を『鉱山労働者』(第三巻第一号 大正十一年一月 一五頁)に掲載した。
- (22) 「上富士前だより」(『ナロオド』第三号 一六頁)。
- (23) 『ナロオド』第一号 一一頁。
- (24) 来間恭「足尾行」(『ナロオド』第六号 一五頁)。
- (25) 十月号において、「都下新聞社労働争議」の記事を皮切りに、一月号において、「鉄工組合概観」と題して、東京鉄工組合、東京電機機械職工組合、機械技工組合、小石川労働会、工友会、工人会などの組合が紹介された。二月号において、山崎一雄は「失業と労働者」と題して、足立製作所と日本鉄工株式会社との争議、四月号において、同じく山崎が「圍池製作所の争議」(「時計工の争議」を報告した。五月号において、「足尾事件報告会」の様子が紹介された外、赤松は「足尾事件を顧みて」と題する論稿を掲げた。
- (26) 麻生久「足尾銅山罷業事件雑感」(『太陽』第二十七巻第六号 大正十年六月 一〇二―七頁)。この論稿以外にも、麻生は「足尾銅山労働争議顛末」(『解放』第三巻第六号 大正十年六月)において足尾の実情を報告した。これらの論稿においてのみでなく、麻生はあらゆる機会に資本主義の打倒を訴

えた。たとえば、「関西の労働者諸君」(『労働者新聞』第五十一号 大正十年十二月一日)では、「時代を支配し、人間を左右し其傍若無人を誇りつゝありし資本主義は諸君が流す鮮血の中に將又諸君が投ぜられたる冷たき牢獄の痛苦のうちに、刻一刻と其生命を失いつゝあるのだ。」と訴えた。

(27) 前掲『建設者同盟の歴史』 八九頁。

(28) 「友愛会創立第十年記念大会記事」(『労働』第十卷第十一号 大正十年十一月号 四一—一〇頁)。

(29) 『労働同盟』には、赤松以外にも、棚橋小虎、麻生久、荏原達が十九名の編集委員中に加つた(『労働同盟』創刊号 大正十一年一月 二頁)。

(30) 杉山元治郎「日本農民組合の設立」(『労働同盟』二月号 大正十一年二月 三一—六頁)。

(31) 『農民新聞』創刊号 大正十一年八月十五日。

(32) 赤松克麿「新人会の歴史的足跡」(『改造』第十卷第六号 昭和三年六月 七三—四頁)。

(33) 前掲『平貞蔵の生涯』 一三二—三頁。

(34) 右同。

三 救 露 活 動

大正九年から十年にかけてはサンヂカリズムが社会運動の理論として新しがられていたが、十年末よりボルシェヴィズムが抬頭し、翌十一年にはこれが社会運動の指導理論となつた。新人会もかような時代的趨勢を反映して、『ナロオド』時代にはボルシェヴィズムから大きな影響を受けた。⁽¹⁾『ナロオド』に多数のボルシェヴィズム関係の論稿が掲げられたのも叙上の理由からであつた。新人会は思想的にボルシェヴィズムに接近するのみでなく、心情的にボルシェヴィズムの祖国ロシアに敬慕の念を抱いていた。元来、新人会はヴ・ナロオド運動の母国であるロシアに対して、限らないあこがれを持つていた。⁽²⁾新人会員は自分達の立場をロシアの大地に置きかえて感傷にひたる傾向があつた。ロシアの大地を大飢饉が襲つてゐることを知つた時、新人会員はわがことのように心を痛めた。救露活動が一般に盛り上るのは大正十一年であるが、新人会が⁽³⁾救露活動に手を染める時期はそれよりも早い大正十年の末である。この年、わが国は近年にない寒さでおおわれた。寒さに

身を震わせるにつけ、新人会は雪に閉ざされたロシアの寒さに思いを馳せた。この寒さもロシアにあつては一入であらう。しかも厳寒の地をさらに飢饉が蹂躪し、餓えのために死ぬ者が十萬を越したという。日本人は敵にでさえ塩を贈る国民である。武士道をもつて国民性の発露とし、仁義を重んずる日本人が窮状に喘ぐロシア救済にたち上がらぬはずがない、と新人会は訴えた。⁽⁴⁾

新人会が関与することになる救露活動が具体性を帯びるのは大正十年十一月二十八日である。この日、旧社会主義同盟の本部に都下の労働団体及び思想団体約四十が参集した。会合した有志百余名は、飢饉に苦しむロシア救済の組織を結成し、直ちに実行方法を話し合った。談合の結果、「露西亞飢饉同情労働会」が結成された。⁽⁵⁾十二月に入り、同労働会は運動を開始した。⁽⁶⁾当局はこの運動を危険視した。あらゆる宣伝、ビラは禁止され、会そのものも非公式に解散命令を受けた。当局よりの干渉を受けながらも、ロシア飢饉救済運動は活発化することとなつた。『ナロオド』は、ロシア飢饉救済の目的で民衆芸術展覽会が開催される、と予告した。⁽⁷⁾同展覽会は十二月二十四、五、六日の三日間、神田駿河台倶楽部で催された。新人会は、露西亞飢饉同情労働会の企画であるこの民衆芸術展覽会を支援した。展覽会の計画・立案者の中には明治時代からの社会主義者である大杉栄、堺利彦、山川均らがあり、陳列物の中には「幸徳秋水ノ生血(額)」や社会主義者の「不穩事項ヲ記載セル書画」⁽⁸⁾等があつたため、この運動はロシアの飢饉救済に藉口して主義の宣伝を企てるものであると当局から思われた。『ナロオド』時代にあつて救露活動は飢饉救済が主目的であつたが、やがて対露干渉反対、労働ロシア即時承認運動に発展した。運動の発展は『ナロオド』終刊後であるから、時期的には『ナロオド』時代を逸脱することになるが、同時代の延長線上に位するものとして大正十一年四月以降の状況を概観してみる。佐野学、赤松克麿、三輪寿壮らが「対露非干渉同志会」を結成するのは大正十一年六月である。⁽⁹⁾彼等の行動は救露活動が社会的に大きく盛り上りを見せる中において開始された。たとえば、大正十一年のメーデーの際にも、メーデーのスローガン中に「労働ロシアの承認」があつた。このスロー

ガンはデモ行進をする時には大きな旗に書かれることとなつた。警視庁はこの旗を立てるべからずと総同盟に申し入れた。⁽¹⁰⁾この申し入れを総同盟は拒否し、メーデー当日は「労農ロシアの承認」の大旗が掲げられた。このような救露活動の盛り上りは、『前衛』が号外をもつて「飢えたるロシアを救え」と訴えることにより、さらに大きな高まりを見せた。⁽¹¹⁾対露非干渉同志会は以上のような社会背景のもとに結成された。以後の救露活動の中でも、新人会とは無縁でない活動が展開された。『労働者新聞』を通じて集められたロシア飢饉救済の寄付金が七月には在独中の岡上守道に送られたこと、⁽¹²⁾また七月二十七日には対露非干渉同志会を代表して細迫兼光が松下芳男とともに総同盟を訪問したことが記録の中に見られるのは、新人会の会友が救露活動に従事したことを示している。『前衛』の「飢えたるロシアを救え」との訴え以後、新人会は学生団体の中でもいち早くこの活動を開始し、学内での運動と宣伝及び寄附金募集、本郷の基督教青年会館での講演会の開催、地方の高等学校の活動家と連絡をとり、高校生の間にこの運動を扶植するなどの活動がなされた。⁽¹⁴⁾たとえば、前衛社にはロシア飢饉救済寄附金が送られてきたが、団体的にこの活動に従事した学生団体として新人会も名を連ねた。⁽¹⁵⁾また、学生の動きが活発化すると同時に世間一般にも救露活動が浸透したが、新人会も九月二十三日に露西亞飢饉救済演説会を開催して世論の喚起に務めた。⁽¹⁷⁾

新人会はロシアを理想の国と見ていた。新人会は、ロシアにおいては人類相愛の社会が出現したと把握していた。⁽¹⁸⁾『ナロオド』にもロシアに生じた共産主義社会は相互扶助の社会であることが指摘された。つまり、ロシアはこの世に実現した理想社会であつた。新人会はロシアを理想社会と考へていたため、この国に襲来した飢饉についても、その責任をロシア共産主義には帰して⁽¹⁹⁾いない。新人会は飢饉のロシアにおいて、相扶け合う民衆の姿に共感をよせた。新人会のロシアびいきは同情などの心情的側面に由来するところが多かつたが、救露活動に新人会を駆立てた背景にも好意的かつ心情的なロシア観があつた。新人会は、解放のために闘つているロシアの民衆を餓死せしめることは全世界の無産階級の最大の恥辱である、と

いう前衛社のアピールに文句なしに同意した。新人会の救露活動は、同会が実践運動の面において比較的活発であつたこの時期では目立つものであつた。

- (1) 中村勝範・内川正夫「『ナロオド』の思想」『法学研究』第五十三巻第四号 昭和五十五年四月 一一三頁。
- (2) 前掲菊川『学生社会運動史』三四頁。
- (3) 右同 一一八一—二二頁。
- (4) 「上富士前より」『ナロオド』第八号 一六頁。
- (5) 前掲『日本労働年鑑 大正十一年』一八三—四頁。旧社会主義同盟本部は東京市麹町区元園町にあつた。
- (6) 日本近代史料叢書A—1『大正後期警保局刊行社会運動史料』(日本近代史料研究会 昭和四十三年十二月) 一〇二頁。
- (7) 「上富士前より」『ナロオド』第七号 一六頁。
- (8) 前掲『大正後期警保局刊行社会運動史料』一〇二—三頁。「芸術展覧会は」同(筆者註、十二月二十四日ヨリ三日間ニ亘リ神田区北甲賀町⁽¹⁾駿台俱樂部ニ於テ「民衆芸術展覧会」名義ノ下ニ之ヲ開催スルコトヲナセリ。依テ所轄警察署ニ於テ出品ニ就キ検閲ヲ為シ、『幸徳秋水の生血(額) 永田耀及大杉榮、堺利彦、山川均、山川菊榮、加藤一夫、望月桂、橋浦時雄等ノ執筆出品ニ係ル不穩事項ヲ記載セル書画計十九点ニ対シ、治安ニ害アリト認め撤回ヲ命ジ、残余三百点ヲ陳列セリ。第一日ニ於ケル入場者ハ約二百名(内学生八分其ノ他ハ職工、商人等ナリトス)ニシテ、同志ハ場内備付ノ黒板ニ時々『ほしきものはバクダン』『断行するは只一途』其ノ他不穩ナル宣伝文ヲ記述セルヲ以テ其ノ都度之ヲ抹削セシメタリ。第二日以後ニ於テモ同様不穩落書及貼紙ヲ為シタルヲ以テ抹削撤去セシメタリ。
- (9) 前掲『日本労働年鑑 大正十二年』四七七頁及び『日本社会運動人名辞典』(青木書店一九七九年三月) 八頁。
- (10) 「本部日記抄」『労働』第十一巻第六号 大正十一年六月 一八一—九頁。
- (11) 「前衛」第一巻第六号 大正十一年六月。なお、田所照明「飢えたる露西亞を」『前衛』第一巻第三号 大正十一年三月 一一九頁)も同趣のアピールである。田所照明は田所輝明のペン・ネームである。菊川忠雄は田所が救露活動において果たした役割を次のように記している。「この運動(筆者註、救露活動)は、当時社会主義同盟の解散以後から、日本の社会運動に於ける最高のスタッフを形作るために活動しつゝあつた日本共産党(第一次共産党)によつて、当時の対露非干渉運動(シベリヤ撤兵ロシア承認)の側面的運動として発意せられたものであつた。この運動は、まさに、タイムリー・ヒットで、国民的支持を背景とし、特に労農組合、社会思想団体、学生層のうちの社会主義分子を巧みに結集して行つた。当時、この運動に専任していたのは、党の学生煽動係ともいふべき田所輝明氏であつた。(前掲菊川『学生社会運動史』一二二頁)。志賀義雄は新人会が救露活動に参加した経緯を次のように回想している。「露西亞飢饉救済運動が活発化し新人会も参加した。この運動は小牧近江がアンリ・バルビュスのフランスでの運動をとり入れたものだが実際は党の側が組織したもので、河崎健次郎が熱心によつていた。(中略)ロシア飢饉救済運動は対露干渉反対、労農ロシア即時承認運動に発

展し、その運動の中から日本共産党が一九二二年七月十五日創立された。」(前掲『東京帝大新人会研究ノート』一二—三頁)。

(12) 『労働者新聞』第六十六号 大正十一年七月十五日。

(13) 『本部日記抄』(『労働』第十一卷第九号 大正十一年九月)。

(14) 前掲菊川『学生社会運動史』一二三頁。

(15) 右 同 一二三頁。新人会以外にロシア飢饉救恤寄附金募集活動を行ったのは、七高鶴鳴会、八高生有志、五高有志、浦和高校有志、福島高商有志、三高有志、外国語学校露語科有志、一高有志、建設者同盟であった。

(16) 「(ロシア飢饉救済運動は)無産階級のみならず、東京の帝大に於ては教授助教講師等俸給の一部を提供して救済資金に当てることにし、全国キリスリ教青年会同盟総会も亦全国的に運動を起すことゝなつた。」(前掲『日本労働年鑑 大正十二年』四七七頁)。

(17) 前掲石堂・堅山『東京帝大新人会の記録』に所収された「新人会年史表」(三七六頁)による。同年史表には、建設者同盟から田所輝明が応援、と記されているが、田所は日本共産党にあつて学生煽動係ともいふべき立場にあり、それが同演説会に田所が登壇した理由であろう。

(18) 前掲中村・内川『「ナロオド」の思想』参照。

(19) 千葉雄次郎「饑饉の露西亞」『ナロオド』第三号 四—五頁。

四 地方の状況

『同胞』時代の新人会は地方支部との触れ合いを第一の目標とし、多くの誌面を地方会員に解放し、新人会員も地方を旅する度に報告文を掲げた。大正十年三月までに支部は、小樽、秋田、金沢、能登、福井、京都、大阪、広島、佐世保、熊本に設けられた。⁽¹⁾ その数は十支部となつたが、いずれも小規模なものであつた。新人会員は地方支部を通じて労働者との接触を期待したが、期待通りの結果は得られなかつた。『ナロオド』時代に入ると、新人会はほとんど地方遊説を行わなかつた。たまたま開催される予定であつた上諏訪の社会問題講演会も、講師が現地にまで出掛けながら、中止となつた。⁽²⁾ 『ナロオド』時代には、新人会は地方との接触についても不振の時代を迎えた。

『ナロオド』も地方支部の結成について無関心ではなく、新人会の綱領に賛同する同志を求めてはいた。数名の会員さえ

あれば、新人会は支部を設立する方針であつた。⁽³⁾本部は支部設立を希望する便りがあることを待つていた。しかし、新しく支部が誕生したとの記録はない。『同胞』には地方からの寄稿が数多く掲載されたが、『ナロオド』では激減している。⁽⁴⁾

『ナロオド』時代の新人会はやがて学内団体に改組されたため、理窟としては、地方支部の存在は不可能になるが、実際には支部の状況が報告されている。報告はいずれも支部が困難を乗り越えて奮闘しているというものである。広島支部では会員丹悦太の身邊にいくつかの災厄が生じていた。丹の愛息が二十歳の若さでこの世を去つた。父を助けて社会の改造運動に従事していた若人の死に新人会は哀悼の意を表した。⁽⁵⁾ 甲合戦の気持で活動を継続していく丹は十一月初旬には家宅搜索を受けた。さらに、丹は「自由か死か」と題した論文のために起訴されることにもなつた。⁽⁶⁾ 「自由か死か」は『民権新聞』の十月号に掲載されたが、安寧秩序を乱すものとして発行人の小川孫六とともに丹は起訴された。十二月二十日の公判では、判事、検事が正面の一段高いところに坐し、一段下の被告の丹悦太のみが起立させられた。丹はこれに抗議し起立しなかつた。原告の検事と被告は同じ立場にあつてしかるべきであるが、自分だけが起立する必要がない、と丹は考えた。社会の不合理と対決している丹は、法廷内に存在する不合理をも承服しなかつた。丹は一介の労働者ではあつたが、新人会広島支部の支部長として活動していた。⁽⁷⁾ かつて、『先駆』時代に、本部より門田武雄を迎えて広島支部は演説会を開き、『同胞』時代には、赤松克膺が広島を訪れ支部主催の座談会がもたれたが、『ナロオド』時代にはかような企画はもはや持つことができなかった。⁽⁸⁾

金沢支部においては、『同胞』時代に高木與一その他が拘引される事件が発生していた。⁽⁹⁾ 『ナロオド』は、その金沢支部で『異邦人』が発行停止となつたが、そのような圧迫に屈する支部ではない、と紹介した。⁽¹⁰⁾ 新人会は金沢支部が勇敢で何者の権威にも屈しない猛者連の集団と評価していた。当局の圧迫干渉は熊本支部をも襲つた。大正十一年一月、熊本支部はリープクネヒトとローザ・ルクセンブルグの記念会を開くべく準備し、すべて整つたところを当局の干渉で中止となつた。⁽¹¹⁾

秋田支部の佐藤賢太は支部通信において若くかつ有能な新人会員を紹介した。⁽¹²⁾ その人物は能代で製材職工組合書記長を務めていた浅野吉十郎であつた。⁽¹³⁾ 浅野は普選運動の闘士であり、能代地方で演説会を開催していた。労働者であつた浅野は、社会の不合理を是正するという点において、新人会の思想に共鳴していた。『ナロオド』には、甲府に在任していた小沢景勝の消息も報じられている。小沢も新人会の思想に共鳴した一人であつた。小沢は新人会員であるとともに、革人会員でもあつた。革人会は山梨にあつた団体で、小沢が矢崎源之助とともに組織していた。革人会は『ナロオド』時代にあたる大正十年十月一日に機関誌『革人』を創刊した。⁽¹⁴⁾ 『革人』には革人会の綱領が掲載された。⁽¹⁵⁾ 革人会の綱領は新人会の追求していた理念と共通していた。革人会の綱領は、「我等は個人及社会の基調たる自主自立並相互扶助の観念を研究し宣伝し実行す、⁽¹⁶⁾ というものであつた。ここにある相互扶助の観念こそ、新人会が憧憬していたものであつた。『革人』は、自分達は自主自立相互扶助の精神を宣伝し実行したいだけであり、独立自営の精神が何故に悪いのか、お互いに共力して助け慰め励ますことが、何故に危険か、それでこそ始めて、人は人らしく生きることができると信ずる、と主張した。⁽¹⁶⁾ 革人会は自からの綱領である相互扶助の精神を破壊するものとして資本主義をあげた。資本主義社会では人口総数の九十六%が僅か四%の有産階級のために搾取されている、⁽¹⁷⁾ としたのが革人会の資本主義観であつた。世界一富裕な英国においてすら人口の九十八%が虐げられ二%のもののみが豊かな生活の享受者である、⁽¹⁸⁾ という新人会の資本主義観と酷似していた。新人会は革人会に対して、『革人』は東京にも珍しい位の良い雑誌である、と最高の評価を与えた。

『ナロオド』時代以前は新人会員が地方を巡る中で、自然との触れ合いのすばらしさを唱いあげ、地方の人々との連帯を誇らしげに機関誌で語つた。『ナロオド』時代に入ると、かような活動は停滞した。『ナロオド』は本部員が地方をオルグした記録を掲げていない。僅かに、鳥取県の村田正三が、『解放』により洗礼され、以後新人会の活動に注目し、自分達も五人の同志を持ち、お互に読書して得た知識を話し合つたり都会の労働者の華々しい奮闘に胸を躍らせたりしている、との

手記を寄稿したのみである。⁽¹⁹⁾ 村田の手記は、新入会員の活動ぶりを読むと自分達も端座していられない、奮闘を祈る、と文を閉じた。地方住人からの唯一の新しい反応であった。

- (1) 『同胞』第六号 大正十年三月 八頁。
- (2) 「上富士前だより」『ナロオド』第四号 一六頁。派遣されたものは、堺利彦、岩佐作太郎、千葉雄次郎、小岩井淨であった。
- (3) 「上富士前より」『ナロオド』第五号 一六頁。
- (4) 熊本の米村徳三の送った二十枚の原稿は長文ゆえに掲載されなかった(『ナロオド』第二号 一六頁)。
- (5) 「上富士前より」『ナロオド』第二号 一六頁。
- (6) 「上富士前だより」『ナロオド』第六号 一六頁。
- (7) 山本茂『広島県社会運動史』(労働旬報社 昭和四十五年三月) 二〇一―五頁。
- (8) 右同。
- (9) 法政大学大原社会問題研究所編『新入会機関誌』(法政大学出版局 一九六九年三月)に附されている増島宏「解題」五八八頁。
- (10) 「上富士前より」『ナロオド』第二号 一六頁。
- (11) 「上富士前より」『ナロオド』第八号 一六頁。
- (12) 佐藤生「秋田支部から」『ナロオド』第一号 一六頁。
- (13) 浅野については、小沢三千雄編『秋田県社会運動の百年―その人と年表―』(二―三頁)に詳しい。なお、前掲『大正後期警保局刊行社会運動史料』(二三二、一六六頁)には、浅野が幹事となっていた青年会既済会が主催した普選に関する政談演説会の記事が見られる。
- (14) 『草人』は定価十銭であった。発行人・編集人・印刷人は矢崎源之助であり、発行所は、甲府市横沢町一〇二であった。
- (15) 『草人』第一号 大正十年十月。
- (16) 『草人』第二号 大正十年十一月。
- (17) 『草人』第一号。
- (18) 和田元「PとKとの話」『ナロオド』第三号 九頁。
- (19) 『ナロオド』第四号 十六頁。

五 結 語

本稿は『ナロオド』時代の新人会がいかなる活動を展開したかについて考察した。『ナロオド』時代の新人会は前三誌の時代に比較し、実践活動面においては不振の時代であつた。この時代には、新人会が主催した演説会、講演会等の回数は減少し、規模も小型となつた。オルグ、労組との提携も新人会としてはおこなわなくなつた。新人会から別離した先輩である会友の活動は労働争議、炭坑の労働運動の中で活発になつていくが、これは会友が社会的活動の中枢に加入し得る年齢に達したということである。卒業生から独立した新人会員は、研究方面に力を入れ、運動には距離をおくことになつた。新人会は組織も運動の実体も変化したが、新人会が反資本主義の姿勢を有することには変化はなかつた。会としての活動であれ、会友が個人として成した活動であれ、目的は資本主義下に呻吟する民衆の救済であつた。『ナロオド』は、新人会がすべての妥協を排してその主義を忠実に守り、そのために発売禁止⁽¹⁾の厄にも遭遇し、数名の犠牲者を出した、と活動を総括した。新人会の活動は、『ナロオド』時代に至り不活発になつたとはいへ、反資本主義の姿勢を貫くことではかわりがなかつた。新人会は活動に臨み、自己を犠牲にし利害打算を越えている、と自負した。赤松克麿の父である照幢が克麿にのこした遺言は、新人会員の心の琴線に触れるものがあつた。照幢の遺言は、「俺が亡くなつても決して葬式をしてはならぬ、また墓標なども立つるに及ばぬ、唯願う所は、お前等の力で不合理な現在の社会を改造して万人共存の新社会を建設する様に努力してくれ⁽³⁾」とあり、それを聞いた新人会員は、真理に忠実ならんとする子弟の行動を目して不孝呼ばわりする頑迷な親爺の跳梁する時代に、照幢は稀に観る偉丈夫である、謹んで敬慕の情を捧げる、とした。実践活動よりも研究活動を重視した『ナロオド』時代の新人会であつたが、万人共存の新社会を建設することは、前三誌の時代と同様、『ナロオド』期新人会の活動目標であつた。

- (1) 『ナロオド』第六号は、来間恭の「敵か味方か」が安寧秩序を害するとして、発売禁止となつた（『上富士前より』△『ナロオド』第八号 一六頁▽）。
- (2) 「新人会三週年」△『ナロオド』第六号 一頁。
- (3) 「上富士前日より」△『ナロオド』第三号 一六頁。

後記 本稿は中村・内川の共同論文であるが一九七八年七月からはじめた「新人会研究会」の共同研究の成果でもある。研究会のメンバーは中村、内川の他に吉田博司（八戸短期大学講師）、酒井正文（中部女子短期大学講師）、宗片邦子（慶大大学院法学研究科政治学専攻修士課程在学中）、玉井清、杉本克己（慶大法学部政治学科四年在学中）である。